

佐伯史談

第七十九号

「郷土史研究」誌
通算第百一号

昭和四十六年十二月十七日

佐伯史談会

事務所 佐伯市大字稲垣字龍護寺 羽柴方

随想

過ぐる一年をかえり見て

——充実したよき一年であつたか——

佐伯史談会 幹事

羽 柴 弘

「充実して光輝あり」という言葉がある。佐伯史談会は今年にそれではないか——これは私の思い上がりである。が、今年を終るに当り、かえり見て雜感を二三掲げて見たいと思う。

先般大分合同新聞の文化欄「箱」に、「佐伯史談会の活動」と題して、わが史談会の現地研修や訪問史談会など、概ね本会の研修活動全野に亘つて、かなり詳細に紹介し、まことに穿つた評価をしてくれている。その内容一々にについては今度の年末集会の際みんまで検討し、当否を論じ、卒直に反省して今後の進展を固めたいと考えている。

過ぐる一年間をかえり見ると、会の内外にいろいろなことがあつた。三月であつたが、はるばる大分から立川先生が来られて、堅田合戦の跡と会員多数と歩かれたが、その先生も今且亡い。当時交通事故で病院で加藤中の私

は当日の様子とかセツトテープに収めてもらい、くり返しくり返り返したい。宇山城址や長世の丘とりの岩田会員説明の現地踏査の録音もよかつたが、今後宇山吉田家で集會で立川先生の親愛にみち御あいさつといふとき、会員亦議論風発甲論乙駁がつづき、まことにすばらしい集會であつたと思う。この歴史的とも見える録音テープも、年末集會の帶上みんなに聞いて貰おうと思つて

いる。

もう今年も餘すところもなく、わが史談会も年末の仕事と急いでいる。本誌も来る十八日を目途に毎日時間を数えるようにして編集や印刷を急いでいる。ごらん通りいささか窮屈なものになり、まことに相すまぬ次第である。

例年のことながら史談会は年末集會といふのをまつている。忘年会でなく過ぐる一か年のしめくくり、反省の會である。今年は十二月二十五日の

本号内容

- 随想 過ぐる一年をかえり見て(羽柴弘)
- 探訪 佐伯四回豊島探訪(佐藤貴一)
- 研究 運上と賦役(藤野孝幸)
- 研究 天領瀬野村製紙(瀬野勘藏)
- 研究 堅田高城をたずねて(岩田善吉)
- 記録 井原の元祖及井半治郎(池田四作)
- 研究 佐伯と國木四雄(山本保)
- 研究 百枝吉田家の高政(吉田)

午後、会場は藤原の高水会長方で。実は先月御土史研究の故に文化功勞者として佐伯市長から表彰された、高水会長に祝意を表すことを兼ねてである。

高水会長が表彰されたことは、私が史談会としても今年特筆すべき成果でもあるので、みんな胸襟をならいて敬談したいと思う。多数会員の参加出席を得たいものである。

さて又一季経つた。今年は順調にすべり出したのであったが、三月末に筆者は因らずも自働車にはねられ、三か月余の病院生活、退院後の静養とつづき、皆さんは大変ご心配をいたさき、且つ御迷惑をおかけした。即ち昭和四十年一月以来、ついで二度も休んだことのない佐伯史談の毎月発行を、何の挨拶もせんで勝手に停止するの止むなきに至つた。即ち四、五、六、七月と休んで、八月は出しなが九月を休んだという始末、然しページ数は三十ページを越すこと三回と努力して、まあ申訳といた育様であつた。

しかしこれは編集者私だけの努力だけで出来たのではない。毎号それだけの原稿が集るだけ、会員諸氏の研究があつたればこそで、今年も編集者といふ一度も原稿不足で困つたことかない。印刷完了、発送の頃にはすでに数篇の次号の原稿が集つていた。左から三十数ページにものぼる号が出来たのである。はじめに書いた大分合同新聞の「笛」では、会員のチームワークのよさによるところが大きいと評している。

そう左、原稿の問題だけではない。会員の融和、信愛、尊敬、協力、それらがまことに円滑に行われている。いろいろな行事に出席する、せんにかゝらず、又研究結果を発表する、せんに聞せず、寛容の気風が佐伯史談会

のカラーとなつて、三百数十名の会員会友の大団結をなしているものである。皆それだけの生活と営みつつ、郷土の歴史や文化にそれぞれ興味を湧かせ、それぞれ好むところを追求している。お互いにそれを認めあつてい

る。それでいいではないか。
然し、かえり見て堅固と歩いたことも、本匠の聖域の洞穴をさぐつたことも、又遠く白井、野津をめぐつたり国衆、宇佐に足とのほしたり、すべて今は楽しい思い出であり、よい勳績が出来た。また地区集會も、竹田史談会の歓迎も、先月の遺墨展も、もろもろの行事また分えり見て、すべてこれ今年一年の行事として私共の心の中に記録したことである。

この反面、力及ばず追いつけぬ面もある。先日の龍護寺集會でちよつと語に出た、御上の自然を守る、監視すること、どうかすると忘れ勝ちであつた。公害追放佐伯市民會議へ史談会より多数入会すが、今重点としてい

る興人の廢液による佐伯湾の汚濁の排撃に對する、会としての協力が弱い。御上の美しい自然を破壊されて、何の歴史か追憶され、郷土文化が衰へるや。交通公害、産業公害などは言わずと知れた、都市の過密や農山漁村の過粗の傾向の陰に、貴重なものか、どんなそこなわけてい

る。私共はその監視体制を強化しなければならぬ。
私は秋晴の一日、鏡峠を歩いた。坦々となつづく尾根の峠道には、すでに落ち葉が散り敷いていた。この道は且て佐伯と府内(大分)を直結する重要な峠道であつた。この道は今通る人とならないが、新しい林道が山腹から尾根に通じようとしてい